

2019年度美術科教育学会リサーチフォーラム in 所沢 報告

三澤一実（武蔵野美術大学）

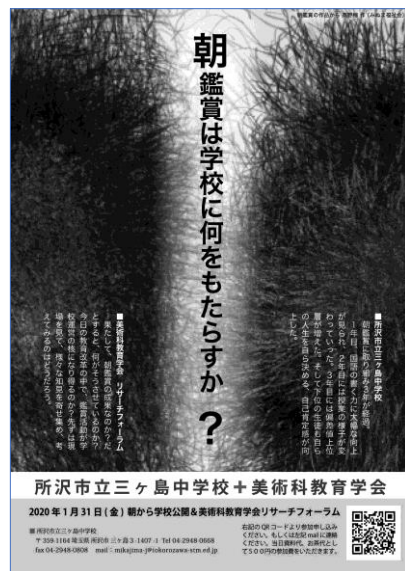
2020年1月31日に埼玉県所沢市立三ヶ島中学校で「朝鑑賞は学校に何をもちたすか」と題して、所沢市立三ヶ島中学校と美術科教育学会リサーチフォーラムの共同研究会発表会が開かれ、青森から長崎まで全国各地から206名の参加者があった。午前中は三ヶ島中学校の授業公開で、三ヶ島中学校の日常の生徒の姿を把握してもらう時間であった。学校の意図としては、3年間朝鑑賞を通して身に付けた力がどのように発揮され、授業改善が行われたかを見てもらう趣旨で、新学習指導要領の完全実施を2年後に控え、朝鑑賞の取り組みから生まれた「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラムマネジメント」の具体的な取り組みが紹介された。

昼食を挟んで午後は2名の教師がファシリテーターとして生徒と朝鑑賞について議論する生徒シンポジウム「朝鑑賞とは？」が行われ、その後休憩を挟んで3人のゲストスピーカーを招いた美術科教育学会リサーチフォーラム in 所沢が開かれた。ゲストスピーカーは、午前中の公開授業と午後の生徒シンポジウムを見学しており、生徒の実態を把握した上で、朝鑑賞についてそれぞれの立場から発言し、さらには会場の参加者からの質問を受けながらディスカッションを深めていく企画であり、リサーチフォーラムのテーマ「朝鑑賞は学校に何をもちたすか」を深める上で午前中からの各企画は独立しながら関連し不可分な構成となっている。

生徒シンポジウムは、朝鑑賞を通して自分の考えを言葉にして発言できる力が生徒に付いたとするならば、そして、教師にファシリテーション能力が身についたとするならば、何の準備もなく異なる学年の生徒に「朝鑑賞とは自分たちにとって何か」を問いかけても面白いだろうと企画したものである。一般的に研究発表は教師が綿密な発表計画を立て、その計画通りに演じていく傾向がある。朝鑑賞を通して生徒同士本音の対話ができるようになったと仮定するならば、朝鑑賞の発展型として、答えの無い問いに向かっていく生徒シンポジウムが可能である。そこで、異なる学年の2年3組と3年4組に残ってもらい生徒シンポジウム「朝鑑賞とは？」を企画した。

シンポジウムはまず教師の「朝鑑賞は好きですか嫌いですか」の発問からスタートした。2年生は「自分が考えたことを人に伝えられることが面白い」「(ちょっとふざけている3年を示して) ああいう3年の話しよりよっぽど面白い」…。それに対して目立ちたがりの3年生男子は、「やっている意味が分からない、朝鑑賞は無駄な時間」と発言する。ファシリテーターの教師はその発言を正面から受け止め、その意味を丁寧に掘り下げていく。終盤に、3年の女子からは「個性は潰されるものだ」「(学校では)正しい答えを毎回求められている。自分の意見は言っちゃいけないんだ」という発言も出た。生徒シンポジウムはギャラリーから出た質問にも答えながら終了した。

参加者の感想に「生徒のシンポジウムとても面白かったです。あの年齢では、たいがい誰かが発言すると、誰かがぐすぐすと笑ったりするものですが、それが一切なく、みんなそれぞれ聞く姿勢を持っていることがすごいいいと思いました。進行する先生が、批判的な意見を歓迎する姿勢をはっきり示していたことも印象的でした。」(報道関係者)



リサーチフォーラムは20分の休憩を挟んで、学校長、美術科教育学会事業部大泉義一の挨拶を経て三澤が趣旨説明をして始まった。趣旨は、朝鑑賞という新たな取り組みは学校教育において教育的成果が認められるのだろうか？という問いに対して多様な意見を集め、その意見によって本取り組みの成果を炙り出していきたいと説明した。

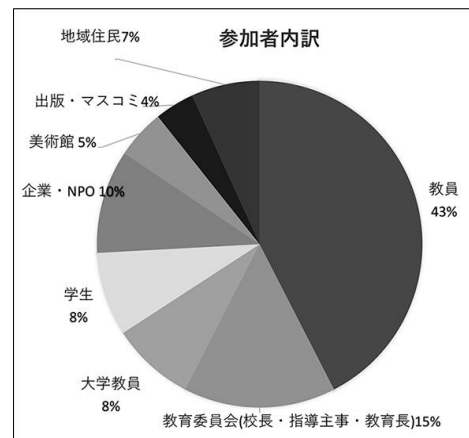
まずはゲストの宮本知弘（東北大学）が、三ヶ島中学校に関わった科研費研究「美術教育における学力分析 ～ループリックを用いた鑑賞学習の効果測定～」(研究代表 奥村高明)の共同研究者として、朝鑑賞におけるループリック活用のデータ分析を発表した。分析では、「朝鑑賞の取り組み自体が、実施する前と後では有意に数値が増加し、一度上がった数値は維持され、その能力は汎用的なメタ認知の能力である」と説明した。続いて、一般人を代表して会社員でありボランティアで美術ナビゲーターをしている東孝彦は、自身の企業での経験や美術館での鑑賞ファシリテーターの経験から、生徒の語りや朝鑑賞を評価した。「朝鑑賞で育っているのは生徒が『問いを立てる』力ではないか。また学校での生徒の同調文化に対し、社会に出た際には企業ではユニークが求められる。その乖離を如何に生徒に伝えるか」と発言した。ジャーナリストの前屋毅は、全国の先進的な取り組みをおこなっている小中学校などの取材経験から、「三ヶ島中学校の朝鑑賞の取り組みは、主体的に自分の考え方を作り出す仕掛けであり、予測不可能な時代において必要な取り組みである。そのことで、教師が変わることが重要である。これからの学校は楽しい学校でなくてはならない」と述べた。会場の参加者からは三ヶ島中学校への教師に対する質問や、成果をどのように読み取るかなどなど、多岐にわたり積極的な発言があり、様々な角度から朝鑑賞の取り組みについて議論ができた。

シンポジウムの最後に印象深い発言があった。大学を卒業後初任で着任した技術科の教諭が、「私は正直言って朝鑑賞は好きでは無かった…3年目の今では結構好き、楽しみなんです」「2年目の途中で『案外生徒は考えているんだな』と気づきそれから朝鑑賞への自分自身の向き合い方が変わった」と述べ、「授業ではそこまで教え込まなくても、道筋さえしっかり押さえれば生徒は自分たちで考えながらゴールにたどり着くんだと気づき指導が変わった」と話した。朝鑑賞は生徒の学力を高めただけでなく、教師の指導力向上に大きな役割を果たしたと確認できる発言であった。

最後に三澤が「このフォーラムは朝鑑賞に対しての一つの解を発表するものではなく、ゲストや会場参加者の多様な意見を通して朝鑑賞の意義を発見していくフォーラムであり、参加者各々が今日の学校教育に対する問題意識を持たたのではないだろうか。朝鑑賞はまだ始まったばかりで成果の検証はこれからであり、多くの研究が待たれる」と締めくくり閉会とした。

参加者の感想には次のようなものがあった。「(生徒と教師の関係性を)真剣に考えさせていただいた。そういう意味でも、とても貴重な機会でした。参加された先生方も一緒かと思います」(学会員)。「生徒に朝鑑賞について本音を聞き出す公開討論会がなかなか興味深かった。ギャラリーが取り巻くなか、『朝鑑賞で、観察力がつく』など良いことをいう生徒が大半の中に、『結局、周りの意見に合わせている。』という厳しい本音もポロッとこぼれる。それに対して、ファシリテーターをしていた先生が『昨日の道徳で個性は潰されるもの、という意見がでたって聞いて、先生は考えちゃったんだけど、学校生活はそうなの?』と問いかける。『みんなそうだし、私ももちろん、そう。』という生徒の言葉に、先生は、『言葉にしてくれてありがとう』と返していた。こんな公開講座で、村度しない本音がチラッと聞き出せる関係に、ちょっと感動した。朝鑑賞で学力が上がることよりも、先生と生徒の関係が変わることの意味の方が大きいと個人的には思うのです」(NPO法人)。「教員は(自分も含めて)、誘導的な質問をしたり、好ましい答えを引き出そうとしがちですが、公開討論では、考えて欲しいことは明確にしつつも、誘導的では無く、ネガティブに思える、どっちに転ぶか分からない答えも取り上げ、掘り下げようとする佐藤先生と加藤先生の姿に感動しました。何よりあの場で、予測不可能な異学年公開討論をしようという発想と行動に移す勇気がすごい。それも朝鑑賞やってきたからこそできることかもしれないと思いました」(小学校教諭)。などがあった。

この紙面を借りて、リサーチフォーラムが開催できたことに対して美術科教育学会に感謝申し上げます。



この紙面を借りて、リサーチフォーラムが開催できたことに対して美術科教育学会に感謝申し上げます。